

武漢居留民社会の日本語文学

——武漢文学会・武漢歌話会の動向から

木 田 隆 文

はじめに

中国を対象とした外地文学研究は、近年、新たな転換点を迎えたように思われる。

これまで検討が重ねられてきた上海に限ってみても、二〇一〇年の『上海文学』の発見を契機として、稿者も『長江文学』や大陸新報社主催の文学懸賞の入選作品集『神鷲』の発掘と各資料の背景にある現地日本語文学状況の検討を行ってきた^②。また最近も秦剛によって現地総合雑誌『大陸』が発見され、その意義が石川巧らによって多角的に検証されている^③。そしてこれらの研究を常に先導してきた大橋毅彦は約三〇年に及ぶ上海研究の集大成である『昭

和文学の上海体験』（勉誠出版 二〇一七・三）において、『大陸往来』をはじめとする多様な現地媒体を活用した論考を発表し、あわせて今後の研究展望として、ジャーナリストたちの動向とともに「人・もの・コトの移動ネットワーク」の検討の必要性を提言している。

今日の日本文学と上海をめぐる検討課題は、かつての主軸であった内地作家による上海表象の問題から、現地文芸文化の実態解明と、そこに浮上する人々や団体の移動・交渉の検討へと重心を移し始めているといえよう。

こうした今日の研究状況には、戦時下の大陸各都市・地域で刊行された日本語文芸資料の相次ぐ発見・報告があることが大きい。目立った成果を挙げれば、阿里塔による蒙疆文芸懇話会の機関誌『蒙疆文学』の復刻^④、石川巧による

北京刊『月刊毎日』の発見と検討⁽⁵⁾、さらには竹松良明⁽⁶⁾、戸塚麻子⁽⁷⁾らによる華北地域の日本語媒体の細目整備などが挙げられ、先の大橋も草野心平ら南京居留の詩人による詩誌『黄鳥』の復刻と検討を行うなど⁽⁸⁾、現地の文芸状況を解明する基礎研究が着実に積み上げられている。しかしそれらの試みは、外地文学研究で先行した旧満州の影響圏にある華北が中心であり、日本人が多数居留した汪兆銘政権支配地域、特に上海周辺都市の資料探索は先の『黄鳥』を除けばまだほとんど手つかずの状況にある。

だが稿者は先ごろ、長江流域の武漢（漢口）で発行された文芸雑誌『武漢文学会雑誌 武漢文化』および『武漢歌人』⁽⁹⁾を入手した。後述するように両誌は文芸雑誌であるばかりではなく、武漢の文化工作機関である中日文化協会武漢分会の機関誌としての性格も持っており、同地の文芸動向と文化政策の実態を確認させる資料としても重要だと思われる。

そこで本稿はこの両誌の分析を通じて、これまで着目されることのなかった武漢の文化動向⁽¹⁰⁾を、上海との比較を交えつつ確認し、あわせて文化政策のプレゼンスが現地文化の動向にもたらした影響の測定を試みたい。それは外地文

化研究に新たな検討材料を提供すると同時に、上海を軸とした汪政権支配地域の文化状況の特質を浮上させるとも思われるからである。

なお両誌の解題および細目は、拙稿「『武漢歌人』・『武漢文学会雑誌 武漢文化』解題および細目」（奈良大学紀要『二〇二・三』）で報告予定である。詳細はそちらを参照されたい。また本稿は論旨の都合上、それと重複する部分があることを断っておく。

一、戦時武漢の文化環境

——中日文化協会武漢分会の活動

汪兆銘政権支配下における文化事業は、主に中日文化協会を軸に実施されていた。同協会は日本大使・阿部信行大將が汪政権の中央政治委員会第一四会議で提案し、一九四〇年七月二十八日に設立された。名誉理事には阿部信行、理事長は汪政権行政院副院長兼外交部長の楮民誼が就任し、各理事には政権の中樞を担う要人が顔をそろえていた。楮民誼はその設立目的について「本会の使命は総理（木田注・近衛文麿）の大亞細亞主義を実現し及び新東亜を建設し

て、両国人民をして深き了解を得せしめる」「中日両国の文化を交流し、双方人士の感情を融和し、並に東方文明を發揚して、善隣友好の目的を達成する」と述べており、これらの点から見ても、中日文化協会が日本側主導の文化工作機関だったことは疑いない。

また中日文化協会は、汪政権の首府・南京に總會（本部）を置き、上海・武漢をはじめとする汪政権支配下の各都市に分会・支会を相次いで創設した。漢口特別市政府發行の都市要覽である『新漢口』に拠れば、武漢分会は一九四一年三月五日に發足、名譽理事には何佩瑤湖北省主席、理事長には張仁蠡漢口特別市市長が就任し、他の理事には汪兆銘政權および駐留日本軍の指導者層が配されていた。これは中日文協南京總會の体制方針をそのままなぞっている。またその活動資金は湖北省および漢口特別市政府、日本陸軍・海軍・外務省から提供されていたが、これは上海の国策新聞社である大陸新報社のバックアップ体制とも近似しており、武漢分会もやはり現地の言論文化工作を目的として設立されていたといえよう。

その武漢分会の文化事業は、分会直轄の總務組・學術組・出版組・芸術組・宣導組の指導のもと、外郭団体に当

たる各種文化団体が担う体制をとり【表参照】、

學術研究会、講演会、座談会、各種出版、作文コンクール、音楽会、美術展など多岐にわたる事業が実現されていた。その具体的活動は、

武漢分会創設以来の活動記録である『中日文化協會武漢分会二週年紀念特刊』（一九四三・三 中日文化協會武漢分会に詳述されているが、それに拠れば『両儀月刊』、『中日文化週刊』（以上華文）、『武漢中日文化週刊』（日文）などの逐次刊行物をはじめとした出版物が多数刊行されており、武漢分会が出版事業にかなりの力を入れていたことがうかがえる。

そしてこうした武漢分会の出版事業の中で、文学は特に

【表】 中日文化協會武漢分会 外郭団体一覧

武漢青年劇団	武漢美術研究会
武漢文芸協會	漢口文協国劇社
武漢文学会	書法研究会
武漢児童文化研究会	武漢音楽協會
江陽社	武漢歌話会
長江画刊社*	電影研究会*
芸術講座同学会*	

※無印は『新漢口』（1942・8）に掲載された団体名。

*は『武漢文化』第2巻第3号（1943・3）の広告によって補足。両資料間で名称に若干の異動があるが、『新漢口』の記載を優先。

※その他、武漢分会の付属学校として中日語文補習学校もあり。

重視される傾向にあった。文芸書としては『日本名家小説選』や『長江三角地帯』（多田裕計「長江デルタ」の中国語訳）が出版されており、加えて「中日文化協会武漢分会二週年紀念 懸賞徵求長編小説啓事」と題する文学懸賞企画も実施されていた。さらに外郭団体にも武漢文芸協会、武漢文学会、武漢歌話会などの複数の文学団体が存在し、そのうち武漢文学会も独自に大東亜戦争一周年記念の文学懸賞を実施するなど、かなり充実した文学場を形成していた。

この武漢分会の事業は、中日文化協会の中心であった南京總會や上海分会をも凌ぐものであった。『大陸新報』はその活況ぶりを「沈滞せる上海分会に比べて」「日支の文化交流に活躍をつづける中日文化協会武漢分会は去る三月五日設立二周年記念を盛大に挙行し、ますます発展ぶりを示してゐる」と驚きと羨望をもって伝えている。当時七万人を数えた上海に比べ武漢居留民の人口は一人程度でしかなかった。にもかかわらず武漢居留民社会は上海に拮抗しうるだけの充実した文芸文化環境を形成していたのである。

ただしこれらの充実した文化環境は、武漢分会の力だけで形成されたものだったわけではない。やや文学からは離れるが、稿者は武漢分会の外郭団体のひとつである武漢音

武漢音楽協會演奏曲目			
1 管絃樂	海隆、胡蝶、丁	1 齊 唱	合唱部員
序 曲 秋の女王.....ヒツヂ		イ、海行く日本.....海移院 櫻 定	
Overture, Queen of Autumn.....Bingli		ロ、大日本の歌.....常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟	
2 男聲重唱	合唱部員	2 管絃樂	相澤 木村文夫、
幕 前 の 夢.....	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟	序 曲 千鳥の曲.....	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟
3 絃樂合奏	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟	3 混聲合唱	合唱部員
イ、モロモロ.....	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟	イ、繪巻と彫刻.....	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟
ロ、セレナーデ.....	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟	ロ、大君の御箱.....	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟
A. Minuet.....Buccherini		4 獨 唱	風 間 雅 子
B. Serenade.....Schubert		イ、歌劇「中」の「君と知る面々.....	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟
4 女聲重唱	合唱部員	ロ、畫 の 夢.....	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟
虎 城 の 月.....	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟	グアイオラン協奏.....	山 田 勝 三
5 管絃樂	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟	5 管絃樂	相澤 馬 路 行
交響曲 第五番 第一樂章 ベートーベン		交響曲 第五番 第一樂章.....	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟
Symphony, No.5 Allegro confor.		Paraisio "Traviata".....	常 蘭、王 登、李 華、張 仲、張 廷、張 瑞、張 麟
Beethoven			

【図版】「中日文化協会武漢分会附設武漢音楽協會 演奏曲目」（発行年末詳）

各演目の間に「ハギレワルクピアノノミアクセントナシ」「チエロきこえず」「高音出ず、テンボ音階なき程」などの批評が鉛筆で書き込まれている（罫線枠内。罫線は稿者が付す）。なお表紙背景には数字の「2」が図案化して描かれており、それにより第2回目の演奏会のプログラムと推定される。

楽協会が実施した定期演奏会のプログラムを保有している。このプログラムにはオーケストラや弦楽重奏、声楽など多彩な演目が記載されており、上海で実施されていた定期演奏会と同様、ある程度充実した内容を持つ定期演奏会が武漢においても開催されていたことが確認できる。だがそれよりもこのパンフレットが興味深いのは、ここに当時の観客が書き込んだと思われる演奏への辛辣な批評がみられることである【図版参照】。

これらプログラムが示す情報は、武漢音楽協会が実施した定期演奏会が上海分会の事業を付け焼刃的に模倣したものではなく、一定の演奏技術を持つ居留民集団と、その良否を判断できる素養を持った観客に支えられていたことを物語っている。そしてそれはまた、武漢の充実した文化環境が武漢分会の文化政策によるものではなく、分会創設のはるか以前から武漢居留民が築いてきた文化資源によるものであったことを示してもいよう。武漢分会の文化政策は、その居留民の文化資源を国策文化事業に転用する形で実施されていたのである。

二、現地文化の〈横領〉 ——武漢文学会の活動

こうした武漢分会による現地文化の転用はまた、分会の外郭団体である武漢文学会（以下、文学会と略）が発刊した『武漢文学会雑誌 武漢文化』の刊行事情からも窺える。

同誌は一九四二年二月ごろに創刊され、一九四三年四月に二巻四号（通巻九号）まで刊行された総合文芸雑誌である。創刊当初の誌名は『武漢文学会雑誌』であったが、一巻三号から『武漢文学会雑誌 武漢文化』（以下、『武漢文化』と略）と改題された。現時点で創刊号は未発見であり、武漢文学会の成立および同誌の発刊経緯を探る手掛かりは乏しい。だが改題が実施された一巻三号の「編輯後記」（二九四二・一〇）には、「武漢文化を文協武漢分会の綜合雑誌となし、大いに武漢の文化に、主として文学文化に貢献しよう」と云ふのである。本号、即ち第三号から誌名が「武漢文学会雑誌」と云ふ余りに偏した名だったのを「武漢文化」にしたのも、その一段階の現はれである」との記述があり、本来は民間媒体であった『武漢文学会雑誌』を武漢分会の

機関誌として転用したことを示している。また続く一卷四号の「編輯後記」⁽¹⁷⁾では「編輯も印刷もそれ等に要する経費の點でも」本格的に武漢分会に業務が移譲されたことが記されており、媒体だけではなく、文学会の運営が完全に武漢分会の事業に吸収されたことが読み取れる。こうした説明からは、武漢分会が武漢文学会を統合することで、現地作家が築き上げた表現媒体を国策言論媒体へと「横領」したことがわかるのである。

そしてその結果、『武漢文化』の方向性は大きく転換することになる。初期の『武漢文学会雑誌』においては、評論に比べ小説や詩歌、随筆が多く、その題材も現地生活に根差したものが主流であった。だが武漢分会への業務移譲が宣言された一卷四号以後、時局評論に紙幅が割かれ、短歌・詩などの韻文も戦意高揚的な題材が目立つなど、次第に翼賛文学媒体としての傾向を強化するのである。

なかでもその傾向が顕著に現れているのが小説である。現地の主要作家のひとりである君野毅一は、初期には「十三點」(『武漢文学会雑誌』一九四二・四)で漢口租界で退廃的な生活を送る男・中田と、中国人娼婦・淑香の心のすれ違いを描いたラブロマンスを描き、また「舗道」(『武漢

文化』一九四二・一〇)でも、租界還付以前に暮らしていた欧州系外国人たちの足跡を追憶するなど、武漢現地を題材にした叙情的な作品を発表していた。だが『武漢文化』の方向転換以後、君野の作品は誌面からしばらく姿を消し、その間に井戸耀介の活動が目立つようになる。井戸は「ある野病記」(『武漢文化』一九四二・一一)で野戦病院での入院生活を題材に取り、「面影」(『武漢文化』一九四三・三)では戦地の文化工作に従事する兵士と中国人児童との交流を描きだすなど、戦時体制に応じた作品を盛んに発表した。しかも井戸の作品は常に視点人物の名前が「井戸」と設定されており、作品を作者自身の経験として読ませる報告文学の手法を意識的に使っている。こうした戦時文学の傾向が誌面で強化されるようになると、先の君野も農事試験場の中国人と日本人中尉の間で育まれる和平建国の理想を描く「菜油燈」(『武漢文化』一九四三・一)のような、典型的な建設小説で誌面に復活してくるのである。

この君野の国策文学への転向は、一見、現地文学者の翼賛化を推進した実現した武漢分会の成功例にも見える。ただこの君野の転向は、武漢分会の指導的影響というより、単に戦時文学の流行に反応した面がある⁽¹⁸⁾。また武漢分会

が武漢文学会に行つた翼賛化の動きも、分会独自の方針ではなく、一九四〇年五月の日本文学報国会成立前後から内地文壇で活発化した文壇新体制の動向と、それを追隨した外地文学団体に共通する動きだったと思われる。

たとえば上海では一九四〇年七月頃に小泉譲を軸とした長江文学会が発足した。長江文学会は国策新聞社である大陸新報社が翼賛言論政策の実践のために結成させた団体であつたが、創設当初に居留民の文芸愛好家を同人に加えたことで、翼賛とは無縁の作品が『大陸新報』文芸欄に横溢する事態を招いた。その結果、翌四一年初頭に長江文学会是一般同人を排除し、新たな文学媒体である『長江文学』の発刊によつて翼賛文壇の形成を図るという事態が生じていた。また同様に大陸新報社は一九四三年に長江文学会を再編した上海文学研究会を結成させたが、その際にもやはり長江文学会会員から翼賛性に乏しい書き手を排除するという動きを見せてもいた。⁽¹⁹⁾

この一九四一年に本格化する上海の翼賛文芸政策の強化と、一九四二年ごろから文学団体の統合を開始した武漢分会の動向を並べて見ると、武漢分会の文芸政策が内地および上海の方針を追隨、模倣していたことがわかる。ただし

現地文壇の翼賛化に対する手法自体は、武漢と上海で微妙に違つていたことには留意しておきたい。なぜなら上海では大陸新報社をはじめとする文化工作機関が翼賛文学団体を結成し、そのうえで時局に沿わない文学者を排除する方法を取る傾向にあつた。だが武漢では居留民の創出した文学場を〈横領〉し、そのうえで書き手の方向性に変更を迫るというより巧妙な方法がとられていたからである。

『武漢文化』の編集者である濱野讃は、「武漢の文化方面の工作は、中支の何れの都市に比較されても極めて活発に動いてゐる（中略）。それはいはゞ特に中支の文化という方面からいへば、対敵的に異常に近い接触面を持つ刺激的な点があるからであるかも知れません」と説明している。⁽²⁰⁾武漢分会が居留民の文学場を横領し、それを現地文学者もある程度受容したのは、大陸侵攻の前線都市という武漢の都市性が官民双方に瀾漫していたためだったのかもしれない。しかもその現地文化界の抱えた翼賛への指向は、武漢分会のもう一つの文学団体である武漢歌話会においてはより複雑な問題を発生させてもいた。

三、翼賛政策への接近と離反

——武漢歌話会の活動

武漢歌話会（以下、歌話会と略）は一九四一年七月二七日に発足した現地短歌結社である。その始まりは松浦久満太郎が武漢現地の文学同好会であった大江文芸会の主要同人、岡本等、梓雲平に呼びかけた私的な歌会であったが、一九四二年五月ごろに武漢分会に編入され、一九四三年末ごろに解散したようである。活動は結社誌『武漢歌人』の刊行を軸に、定例の歌会や、草野心平をはじめとする来漢文学者との交流など幅広く行われていた。

その『武漢歌人』は一九四一年一二月に創刊され、一九四三年九月まで全一六冊が刊行された。創刊当初の編集発行人は、歌話会の発起人である松浦久満太郎が務めている。短歌および歌論のほか、武漢の歴史や漢口租界の文化状況を伝える彙報や記録類が載せられており、武漢の文化研究においても非常に重要な意味を持つものである。

先に確認したように、武漢歌話会の前身は大江文芸会という居留民文学者による民間団体であった。だが創刊号の

松浦久満太郎「編輯後記」（一九四一・一二）を参照すると、「本誌の創刊については中日文化協会武漢分会の御支持と御援助とを戴いてゐる。同会幹事岸富造氏には少なからぬ御配慮と御鞭撻を得た」との記述があり、おそらくは資金調達のためであろう、『武漢歌人』創刊時点で意図的に武漢分会と協力関係を結んでいたことが記されている。そのことは武漢文学会が分会側の意向によって発表媒体を横領されたのに対し、武漢歌話会はむしろ発表媒体を求めて自発的に分会に接近したことを示しているよう。

だがそれは一方で、『武漢歌人』がその出発から避けがたい方向性の亀裂を抱えこむ原因ともなった。同誌創刊号には居留民歌人の詠草が並ぶ「作品」欄と、現役兵士の詠草を掲載する「先陣集」が並置されている。創刊号「編輯後記」ではこの「戦陣集」は陸軍兵長の寺中作雄^②の「協力」で実現したと説明されているが、歌話会は松浦久満太郎を軸とした現地歌人によって発足したものであり、その時点で陸軍・軍人の関与は記されていないかった。その状況を考えると、編集に陸軍の意向が介入したのは、陸軍からの資金援助によって運営されていた武漢分会の忖度が働いたためであり、歌話会が武漢分会に出版協力を求めた時点で規

程されたことであつた。結果『武漢歌人』は、短歌による「抒情性に富んだ現地的特色」の実現と翼賛文化政策への挺身という、分裂した方向性を抱え込みながら出発せざるを得なくなつたのである。

事実、『武漢歌人』創刊当初の誌面には、現地短歌と翼賛短歌という相反する性質の歌が並置されている。一卷二号（一九四二・二）は、一九四一年一月の日米開戦を受けて編集された号である。巻頭では「大東亜戦争を讃ふ」と題された特集が組まれ、瀧本肇「聖戦讃頌」、寺中作雄「驕夷撃滅」、朝暉美「大東亜戦に寄せて」、松浦久満太郎「十二月八日以後」など、開戦を寿ぐ紋切り型の戦争賛美の歌が多数掲載されていた。だがそうしたあからさまな翼賛性を示す詠草の中、林山郎「雑詠」は「叙情性に富んだ現地的特色」の理想形が見事に表現された歌として目を惹く。

泥水の壁にうする、夕日影驢馬小孩に叱られて行く
漢水の暗きに在りて灯の一つ近づき来るは渡船ならん
街路樹一葉俚の幌に落ち込に待つ車夫居眠りにけり
児等の声民船ふねの中より漏れ聞え夕餉の煙帆柱登る
澄み渡る元旦の空にアドバルン香港占領の文字なびかせつ

夕方の淡い光の中、小孩（中国人の子供）に追われながらとほとほと歩く驢馬の影や、眠りこける車夫、あるいは水上生活者のささやかな夕餉——林の歌からは、武漢に生きる中国人庶民に対する深い共感を見ることができると。むしろ林も香港占領のアドバルンといった戦時的題材を詠んでいるが、その主眼はあくまで澄み渡る元旦の空を描くことにあり、戦意高揚を高吟する寺中、松浦ら編集同人の歌とは程遠いものがある。

ちなみに『武漢歌人』に毎号掲載される「武漢歌話会の歩み」には、毎月の定例歌会の詳細が記されている。そこで林は第一回の歌会からつねに最高得点を取り続け、歌話会同人の中で最も優れた詠み手として評価されていた。同人が林の短歌に高い評価を与えていたという事実は、会員の多くを占める現地歌人の理想は「叙情性に富んだ現地的特色」の実現であり、「戦陣集」をはじめとする翼賛短歌の創作ではなかったことを示しているよう。

四、文化政策との共犯関係

だが歌話会同人の創作的方向性が「叙情性に富んだ現地

的特色」に傾斜することは、編集者として武漢分会と陸軍に配慮する立場にあった松浦久満太郎にとっては不都合な面があったとも思われる。松浦は創刊号の最終頁に小さく掲載された「編輯後記」では、翼賛への挺身とともに「叙情性に富んだ現地的特色」の必要性も述べていた。だが同じ創刊号でも「扉の文」(巻頭言)では、歌話会の使命は東亜「新秩序建設」にあるとし、そのためには万葉集以来の「日本精神の伝統に磨き上げられたこの短詩の中に今日こそ民族の発展する精神文化の土壤を力強くつちかはねばならぬ」ことを主張している。松浦は雑誌の目立つ部分においては、「現地的特色」を隠蔽し、代わりに「日本精神」の涵養と「新秩序建設」による日華提携の実現を強く表明しているのである。しかもこうした翼賛性の強調は、陸軍側の編集代表であった寺中作雄が歌話会の方角性を提示した「武漢歌人の使命」(『武漢歌人』一九四一・一二)では、より直截的な形で表されている。

中日文化の交流の為に短歌を作つて何になると、単純に考へる人がある。私はあへて、中国に来れば直に中国文学に親しみ、中国の風習に同化することが中日文化交流の道だとは考へない。(中略)／日本から中国を

理解すると同時に、中国に日本を理解させねばならぬ。日本の文化を、日本の文学を、日本人の考へ方を、進んで理解させねばならぬ。日本人はかゝる場合には常にかく行動する。日本人は常にかく考へる。さう云ふ矜持が日本人には必要である。／(中略)／われわれは何処までも日本人であり、日本精神の体得者であり、何時如何なる場所でも日本の短歌を詠み、平気で飾り気なく、ありのまゝに行動して居ればよいのである。さうする事によつて自然に、中国人をして日本及日本人を理解させることが出来るであらう。(中略)／中国に於てこそ、少しも中国ぢみたところのない純粹な短歌の境地で生活することが、私は必要であると思ふ。それが却つて中日文化交流の道であるのではなからうか。／武漢に於ける「武漢歌人」誕生の使命はさう云ふ所にも意味があると思ふのである。(傍線木田)

寺中はここで、現地歌人が「少しも中国ぢみたところのない純粹な短歌の境地で生活」し、その「ありのまま」の日本人の行動を中国側に示すことこそが「中日文化交流の道」になることを主張する。だがそれは言うまでもなく、日本側の欲望を一方的に押し付ける大東亜共栄の理念をそのま

ま言い換えたものに過ぎない。「日本精神の伝統」を基礎に日華提携の理想を語る松浦同様、歌話会幹部の理念には林山郎の短歌に滲む中国人への共感のまなざしが完全に抜け落ちているのである。

ただこうした一方的な日華提携の理想は、なにも歌話会特有の発想方法だったわけではない。上海文学研究会の中心的人物であった池田克己は、『上海文学（冬春作品）』（二九四四・四）の「編輯記」に、以下のような理想を書きつけている。

日華文学交流の声やうやく騒然とし、昨年以來來華した日本作家は十指を数へる状態である。われわれはこれら來華作家の信念と成果に対しては、良きにつけ悪しきにつけ、何等嘴を入れるものではない。しかしながら、われわれ現地文学青年が、中国の前面に於て、正しい日本文学の創作を念じてゐる事実が、良心的な中国作家に刺激を与へ、地味ではあるが極めて自然な交流状態を生じつゝ、あることをよろこびをもつて報告しておきたい。われわれはこのことを解説ぬきの文学交流と呼んでゐる。（中略）中国文学の理念が如何にあらねばならぬかといふ問題は、日本人の側から観念的

な言葉を投げかけることによつて解決されるものではなく、日本の正しい文学姿勢を見せることによつてのみ、中国側に於て自ら生成されるべきものであると思ふのである。（傍線木田）

池田が「日華文学交流」の理想として掲げる「解説抜き」の文学交流は、「日本の正しい文学姿勢を見せることによつてのみ、中国側に」伝わるという。この日本側の一方的押し付けを「交流」と言つて憚らない池田の主張は、明らかに先の寺中の発言と通底している。

こうした上海文学研究会と武漢文学会の相似性は、歌話会中心同人をはじめとする武漢の文学者たちが、内地及び汪政権の翼賛文芸政策を自覺的に取り込もうとしていた側面があったことを示していよう。しかもその歌話会と翼賛文芸政策の共犯関係は、歌話会が正式に武漢分会の外郭団体に編入されて以後、より明確な形で進行してゆく。

五、現地文学者の二面性

歌話会が武漢分会へ正式に編入された経緯は、『武漢歌人』一卷五号（一九四二・五）で報告されている。編輯部

「歌話会に就ての御願ひ」には「文化協会の所属になるといふのは公的存在に飛躍するといふ必然性を持つに至つた」ため、これまでの自由な体制を改め、「外形的形式」の整備を行うとの言及があり、また松浦久満太郎「編輯後記」では、「岸富造先生其他」武漢分会側の指導のもとで運営を行うなど、歌話会が組織面での体制変更を行ったことが宣言されている。さらに同号には紅林桂之助の随筆「流れ」が掲載されているが、松浦は紅林をあえて「中日文化協会所属の武漢文学会雑誌を編輯されてゐる方」と紹介し、先に武漢分会の外郭団体となつた武漢文学会との連携が意識させる表現も見られ、現地文学者の統合が進められた様子も見受けられる。

また『武漢歌人』一卷八号（一九四二・八）からは、奥付発行者名に「中日文化協会武漢分会附設」の文字が付され、同誌が正式に武漢分会の刊行物として位置づけられたことが宣言されるとともに、国策媒体としての性格を強調した誌面構成をとるようになる。一例を挙げれば、一九四二年八月二三日には歌話会同人が「在漢兵站病院の仲間部隊に慰問短歌会」が実施しており、一卷九号（一九四二・九）からは、居留民同人の詠草が掲載される「作品」欄と、軍人

短歌の掲載欄である「戎衣集」の比率が逆転し、歌話会の活動と『武漢歌人』の誌面は軍人慰問を軸としたものに移行してゆく。そして『武漢歌人』は一卷九号（一九四二・九）の発刊のちに約三ヶ月の休止期間をとるが、そこでさらに体制強化が行われたのであろう、次の二巻一号（一九四三・一）からよりいっそう翼賛性を強化した媒体として再出発した。

二巻一号の「編輯後記」には、歌話会が「陣容建直し」の意図を以つて創設時から編集発行を務めた松浦久満太郎を「更迭」し、瀧本肇にその編集責任の座を交代したことを告げている。⁽²⁴⁾ また同号に掲載された「對影居雜記」は瀧本の所信表明ともいふべき文章だが、そこで瀧本は、同人に對し「大君の赤子としての本分達成に邁進することこそ大和歌を行する者の本領」⁽²⁵⁾であることを宣言するなど、歌話会内部に残存していた現地性を重んじる方向性を完全に一掃する態度を示している。

この瀧本の翼賛的な宣言は、先の松浦久満太郎の創刊号「巻頭言」と似通つた面がある。だが少し触れたように、松浦が「巻頭言」で主張した日華提携の実現は、資金提供側の武漢分会および軍部への配慮のために発せられたように

も思える。松浦の短歌に目を向けると、一卷二号の開戦特集を除いては万葉調や翼賛の題材を意識させるものは少なく、むしろ林山郎に通じる現地的題材を詠んだものが多い。松浦もまた本質的には現地歌人であつたのである。ただ、そのように松浦を捉え直すならば、彼は自身の文学的良心を封印することで翼賛に協力したということにもなる。だがその松浦の面従腹背の態度は、決して批判されるべきものではない。なぜならそれこそが『武漢歌人』という文学場の創出とその維持に寄与したからである。松浦は歌話会の創設者としての自身の立場を自覚し、現地短歌の発展と文化政策との穩健的な融合を目指すことで文学場の維持を図ろうとしていたのかもしれない。

だがそれに対し、松浦の後継者である瀧本肇は本質的な翼賛主義者であつたように感じられる。瀧本の短歌は初期の段階から翼賛傾向の強い題材を好んで歌う傾向にあつた。また彼は先に引用した「對影居雜記」において自らの皇国民としての強い自覚を述べていたが、その文の直前で、「本会推進の私の意志は、夙に各位御熟知のことと思ひます」という文言を添えている。彼の愛国主義的な「大和歌」への傾斜は、自他ともに認めるほど熱を帯びたものであつ

たと考えられるのである。実際、瀧本の強い翼賛性は、彼の編集した『武漢歌人』の誌面、特に表紙に端的に現れている。創刊号以来、同誌の表紙には武漢現地の風物が描かれ、題名の上にはその現地性を誇るかのように「現地編輯」と明記されていた。だが瀧本が編集を担当した二巻一号からは、表紙絵は兵士の埴輪や、鉄兜を被る兵士の肖像などに差し替えられ、「現地編輯」の文字も消されるなど、「大和歌」への敬慕が強調されるのである。

そしてこの瀧本の急進的な転換によって、歌話会内部の亀裂は決定的なものとなつた。歌話会の陣容刷新が報じられた二巻二号の「編輯後記」（九四三・二）には、「二月号の、同人作品は、どうしたものか、原稿の集りが極めて悪かつた。（中略）今月のように投稿の不振を啣つのも前例になく、遺憾の極みである。今少し編輯の局に当る者に対して、特に同人各位の理解ある御協力を切望して止まない」と、居留民歌人からの投稿が激減したことが記されている。しかもその離反はこれ以後の号でも続き、結果として『武漢歌人』は従軍兵士の歌で誌面が埋め尽くされた前線慰問雑誌へとその意味を変えるのである。

この動きからは、現地文学者の翼賛に対する複雑な反応

が見えてくる。『武漢歌人』は文化政策側の期待通りに翼賛媒体へと転換した。しかしそれを契機に多くの現地歌人が歌話会を見限ったということは、現地文化政策が居留民に何ら求心性を発揮していなかったことを物語っているだろう。たしかに歌話会自体は現地文化政策との共犯関係をとり結び、それによって翼賛体制に飲み込まれた。しかし個々の同人たちの動きを見るならば、必ずしも翼賛一枚岩の体制で動いていたのではなく、文化支配のプレゼンスに対して微妙な温度差と距離感をとりながら活動していたこと浮かび上がってくるのである。

おわりに——武漢文化研究の可能性

武漢分会は一九四三年八月を機に『武漢歌人』への補助金を停止し、結果として同誌は廃刊に追い込まれた。⁽²⁰⁾ 補助金停止の理由は先にふれたプロパガンダ媒体としての機能不全という問題もあるが、分会の機関誌として位置づけられた『武漢文化』もこの前後に廃刊したことを考えあわせると、主には武漢分会自体の資金不足によるものだと思われる。こうした廃刊事情を、改めてこれまでの議論とと

もに振り返っておくならば、武漢分会は現地文化振興の名目のもと、居留民の形成してきた文学場に資金を提供した。だがそれは彼らの築いた文学的資産を国策に横領する試みでもあり、最終的にはその資金すら引き上げることで現地文学の息の根を止めた。中日文化協会武漢分会は、武漢居留民たちの文学的伝統と営為を、文化政策の名のもとに完全に破壊したのである。

だがそうした武漢分会の活動を、改めて別の観点から眺め直すと、同会がたしかに現地文化に寄与していた面があったことは忘れてはならない。武漢分会出版組副主任幹事であった内田佐和吉は、明治期から武漢に居留する老漢口で、『武漢巷史』（一九四四・五、中日文化協会武漢分会委託・漢口思明堂書店）を代表とする武漢の文化・歴史に関する著作を多数出版し、分会でも邦語週刊誌『武漢中日文化週刊』の編集を担当していた。また彼は武漢分会と同時に居留民団にも勤務し、漢口思明堂書店を経営するなど、武漢文化界のキーパーソンであった。この内田の立場は、内山書店を拠点に上海の文化交流サロンを形成した内山完造のそれを想起させる。武漢分会がこうした性格を持つ内田を理事に据えたことは、国策文化政策を推進するだけの目的で事

業を行っていたわけではないことを物語っている。

また武漢分会の出版活動に目を向けるならば、上海と同様、武漢もまた華中における「人・もの・コトの移動のネットワーク」の重要な交点になっていたことが確認できる。たとえば武漢分会が出版した『中日文化戦士合作集 棠棣之華』（一九四四・二〇、中日文化協会湖北（＝武漢）分会編）は、南京開催の第三回大東亜文学者大会に関連して来漢した高見順・上田廣らと、中国人作家の共同で出版されており、武漢分会が内地作家と現地作家の交流を促し、そこで様々な文化的交渉があったことを想像させる。さらに『武漢大陸新報』には、同じく大東亜文学者大会にかかわって来漢した百田宗治、壇一雄、安田貞雄と草野心平が、雑誌『武漢日本詩』の発行を計画したことや、前線兵士に向けた慰問文集が出版され、そこに高見順、百田宗治、上田廣、石黒敬七、安田貞雄、壇一雄、渡辺はま子などの寄稿があったことが記されている。⁽²⁸⁾そしてこうした文学者の移動は、内地からの来漢作家だけの問題に限らない。武漢文学会会員の福田俊之や庄司猛夫らは南京の『黄鳥』に合流し、大江文芸会から武漢歌話会に参加した梓雲平は、やがて上海文学研究会にその活動の場を移してもいる。

武漢とその周辺都市、そして内地の間で展開する文学者の移動とその営為は、これまでの外地文学研究の主流であった一都市単位に限定した研究視点で追うことは困難である。そしてその移動の痕跡を確認するためには、結局のところこれまで未検討であったエリアも含め、大陸各地域での日本語文学活動の実態解明と、それを裏付ける資料の探索・発掘を蓄積するしかない。堂々巡りを承知で言えば、本報告がこれまで手付かずであった武漢の文芸文化状況を素描したのは、その第一歩とするためであった。

注

- (1) 日本近代文学会二〇一〇年度秋季大会パネル発表「『上海文学』のポテンシャルエネルギー―日本統治下の上海文学界を考える」(二〇一〇・一〇・二四、於・三重大学)においてその発見報告がなされた。

- (2) 拙稿「武田泰淳「中秋節の頃(上)」の周辺―日本統治下上海における邦人文学界の状況」(『日本近代文学』二〇一一年・一二)、「長江文学会「土曜文芸」『長江文学』細目―日本統治下上海の邦語文芸雑誌一斑」(『奈良大学紀要』二〇一二・三)、「武田泰淳「神鷲」の後景―日本統治下上海の

文学懸賞」(『國文学論叢』二〇一七・二)など。

- (3) 「特集 戦時下上海の日本語総合雑誌『大陸』再発見」(『早稲田文学』二〇一八・三・四)、稿者も四月号に「失われたパズルピース―武田泰淳『城隍廟附近』と『大陸』」を寄稿。

- (4) 阿莉塔編『蒙疆文学』一九四二―四四年―蒙疆文芸懇話会機関誌(二〇一八・五―二〇一九・二、金沢文圃閣)

- (5) 石川巧「徹底検証・『月刊毎日』とは何か+目次詳細」および「大型企画 北京発、幻の『月刊毎日』発掘の衝撃」(『新潮』二〇一六・二)

- (6) 戦前期中国関係雑誌細目集覧刊行会編(代表・竹松良明)『戦前期中国関係雑誌細目集覧』(二〇一八・一二、三人社)など。

- (7) 戸塚麻子には、『燕京文学』細目(『滋賀文教短期大学紀要』二〇一五・三)、「創刊期『東亜新報』(一九三九)の文芸・文化記事について―日本占領下北京の日本語新聞」(『常葉大学教育学部紀要』二〇一七・一二)、「日中戦争下天津の総合雑誌『京津事情』について付・細目(二)」(『常葉大学教育学部紀要』二〇二〇・三)をはじめとした多数の業績がある。

- (8) 大橋毅彦・鈴木ひとみ『黄鳥 復刻版』(二〇一八・一二、三人社)

- (9) 両誌の発見および概要は、「汪兆銘政権勢力下の日本語文学―上海・南京・武漢を中心に」(『国際シンポジウム・東アジアの日本文学研究の可能性と課題』二〇一八年度昭和文学会春季大会、於・東京女子大学、二〇一八・六・二六)において報告している。本稿はその発表をもとにしたものである。

- (10) 文学に限らず、武漢日本人居留民の研究はまだほとんど手付かずの状態にある。中国近代史においては野澤豊「武漢近現代史研究会の呼び掛け」(『近きに在りて―近現代中国をめぐる討論の広場』二〇〇二・六)が武漢近現代史研究の意義を指摘。その後同誌誌上で二回(二〇〇三・八、二〇〇四・一二)にわたり特集が組まれた。またそれと前後して政治史・建築・都市研究の分野でも検討が加えられ、田中重光『近代・中国の都市と建築』(二〇〇五・四、相模書房)、太里浩秋・孫安石編『神奈川大学人文学研究叢書二二』中国における日本租界―重慶・漢口・杭州・上海(二〇〇六・二、御茶の水書房)に収載された論考によって漢口租界の形成過程に関する解明がなされた。ただしその多くは一九二〇年代までの状況の解明であり、漢口租界還付後の状況にふれたものは少ない。また同様に居留民の文化的な活動については未開拓である。本稿が個々の文学作品の分析よりも歴史状況の説明に比重を置いているのは、これら武漢日本人居留民研究の

空白部を補填するねらいを持つためでもある。

- (11) 無署名「中日文化協会記事（成立大会記事）」（『中日文化』日版創刊号、一九四一・三）

- (12) 漢口特別市政府『新漢口』（一九四二・八）。武漢分会の概要は「1、中日文化協会武漢分会」（日語欄二〇頁）に拠る。

- (13) 『武漢文化』（二卷五号、一九四二・一二）の「募集小説当選発表」と題する記事には、「大東亜戦争一周年記念として先に公募せる創作小説は応募作品に就き既定の審査を経て左記の如く当選を決定せり」として、以下の作品の入選があったことを伝えている。

- 一等 該当作ナシ／二等「先鋒」秦昌平「菜油燈」君野毅（二名各百円）／三等「一年経つ」八田保「面影」井戸耀介「長江の産業員」金政盾（三名各五十円）
- (14) 無署名「伸びゆく武漢 目覚ましい中日文化の交流 演野さんのご自慢」（『大陸新報』一九四三・五・七、朝刊二面）
- (15) 上海租界では工部局交響楽団による定期演奏会の伝統があったが、一九四一年の日本統治以降も、文化懐柔政策によって上海交響楽団の定期演奏会として引き継がれていた。この武漢音楽協会による定期演奏会は、その上海の文化政策を手本としておこなわれた面があったと思われる。

- (16) 第二号「編輯後記」によれば、第二号の編集は「シンガポール陥落の報」を聞きながら取り掛かったとされている。

シンガポール陥落が一九四二年二月一日であること、また『武漢文学会雑誌』がおおよそ毎月の上旬に刊行されていることを勘案すれば、創刊号は一九四二年二月初頭に刊行されたと推定されよう。

- (17) 編輯部「編輯後記」（『武漢文化』一九四二・一一）では「武漢文化も秋冷を向へて第四号を送り出す事になった前号までを基礎時代と謂へば本號あたりから修練の段階へと這入つたと謂へる。編輯も印刷もそれ等に要する経費の點でも、まだ充分とは云えないまでもすつかりこれから先きの見通しが就いたつもりである」と、運営体制が本格的に武漢分会に移譲されたことが記されている。またこの号から表紙も傾向を変更し、図案が固定化され、印刷所も武漢分会の他の出版物と同じく華中印書館に変更。

- (18) 君野の「菜油燈」は、注13で示したように武漢文学会が実施した「大東亜戦一周年記念募集当選小説」の二等に入選しているが、その題材・結構は小泉譲「桑園地帯」の影響を思わせる。懸賞小説の応募開始時期が未詳のため君野の執筆時期の確定はできないが、「桑園地帯」の前半部は上海刊行の『長江文学』（一九四二・五）に掲載されており、君野が「桑園地帯」を参考にした可能性はあろう。君野は自身の転身が迫られた際に、上海の代表的作家でもあった小泉の「桑園地帯」を模倣し、それにより自身の翼賛への

転換を図ったのかもしれない。

- (19) 長江文学会から上海文学研究会への展開は、拙稿「日本統治下上海の文学的グレーゾーン―長江文学会／上海文学研究会の動向から」（竹松良明他編『外地』日本語文学への射程）二〇一四・三、双文社出版）を参照されたい。

(20) 注14に同じ。

- (21) 武漢歌話会発足の経緯については、松浦久満太郎「揚子江の畔にて（一）歌話会成立の由来」（『武漢歌人』一九四一・一二）以下のように説明されている。

私が漢口へ来て茲で文学に關した仲間のあることを初めて聞いたのは今年の春のことでは岡本等、梓雲平、野村杜季子、田中静梧君らの結成になつた大江文芸会の集りであつた。當時私が参加すると前後して山田箕好、高村信雄、妹尾禎郎、小林宗平、靱曉美の諸君の顔ぶれが揃ひ内容も賑ぎやかになつた（中略）私は文芸会の熱心な世話をしてくれてゐた岡本、梓の両君の援助とはげましを得てまず武漢歌話会といふ形式で在住者に呼びかけ（中略）／＼ともかくも、七月二十七日に三教街の東京茶房で歌会が開かれてみると当日の参加者は実に十五名という予想外の成績であつた。（中略）当日の会合が実質的に武漢歌話会の成立となつて今日の如く短期間のうちに斯様な發展となつたことは言ふまでもない。

- (22) 武漢歌話会が来漢文化人と居留民文学者の交流拠点で

あつたことは、『武漢歌人』に毎号掲載された彙報「武漢歌話会の歩み」によつて確認できる。

- (23) 寺中作雄は戦後、文部省社会教育課長として公民館の設置に尽力した人物として知られる。武漢駐留時代の動向は不明だが、昭和十三年に文部省に入省しており、その時点ですでに文部官僚であることからみて、現地でも情報・文化工作の任務にあつたことが想像される。武漢歌話会への関与もその一環と思われる。

- (24) 無署名「編輯後記」（『武漢歌人』一九四三・一）

- (25) 瀧本肇「對影居雜記」（『武漢歌人』一九四三・一）

- (26) 世古（正文）「編輯後記」（『武漢歌人』一九四三・二）の記述による。

- (27) 「顧問に草野心平氏 武漢日本詩会 華々しく発足」（『武漢大陸新報』一九四四・八・一七、四画）

- (28) 「将兵へ贈る感謝の慰問集 前線派遣文化戦士を総動員」（『武漢大陸新報』一九四四・八・二三、四画）

※本研究は、JSPS 科研費（15K00311）「戦後日本における戦時上海邦人文芸文化ネットワークの移植と展開」（研究代表者・木田隆文）の助成を受けたものである。

（奈良大学文学部教授）